



勤務校における「日本史探究」の実践について（二〇二二年度シンポジウム「『歴史探究』を考える」報告要旨）

吉武，直哉

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:14*-14*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491664>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491664>



二〇二二年度シンポジウム『歴史探究』を考える」報告要旨

勤務校における「日本史探究」の 実践について

吉武 直哉

まずは勤務校の特色を説明した後、日本史探究導入に向けた取り組みを紹介した。具体的には、新課程に対応したシラバスの作成や教科書の選定を行っていること、新課程に対応した授業・評価の工夫を行っていることなどを述べた。

新課程に対応した授業・評価の工夫としては、教科書の内容を弾力的に運用することで単元を充実させ、生徒の活動自体を評価することを紹介した。特に、従来の「知識」偏重の授業づくりではなく、「問い」を中心とした授業づくりを意識し、中世の起請文や近代以降の風刺画といった実際の史料を用いることを述べた。また生徒が主体的に文章を記述することを評価において重視し、各授業の振り返りで「まとめ」の記述を行うことや、考査後に「ポートフォリオ」で到達度をはかることも述べた。

またICT教材の活用についても事例を挙げた。具体的には、各教室に設置されたプロジェクターを用いることによる史料の提示や、勤務校で採用する「ロイロノート」というアプリで評価物の提出状況の管理が容易になったことを紹介した。

最後に今後の展望として、二〇二〇年度シンポジウムでの井上俊希氏の主張を念頭に置き、歴史「で／から」学ぶ授業への転換を述べ、知識を「暗記する」だけでなく、知識を「理解・活用する」ことを強調し、生徒自身が学んだことを説明できることが重要であるという意見を述べ、報告を終えた。